

## 〔「柳沢淇園」展によせて〕

## 柳沢淇園作品と唐招提寺蔵「臥遊千里図画冊」

江戸時代中期、絵画の世界において新たな潮流が生まれつつありました。中世に渡ってきた中国古画から展開した狩野派中心の画壇にあきたらず、明・清時代の新しい中国絵画の刺激を受け、清新な絵画を目指す流れです。この中から、江戸時代後期にかけて隆盛してゆく文人画が育まれます。十八世紀前半に活躍し、日本の文人画の先駆者と称されるのが柳沢淇園（柳里恭）です。

淇園は、元禄十六年（1703）、柳沢吉保の筆頭家老である柳沢保格の次男として生まれました。字は公美、名は貞貴、淇園はその号です。父は曾禰家でしたが、吉保からの信頼が篤く、柳沢姓を名乗ることを許されていました。淇園も元服する際に、吉保の跡を継いだ吉里より柳沢姓を賜ります。少年期の淇園は、吉保のもとに集った儒学者の荻生徂徠や黄檗僧の悦峯道章など、一流の文化人と交流しながら成長しました。特に絵画に優れ、十二、三歳にして早くも狩野派を批判します。「絵は唐絵を学ぶべし」（随筆『ひとりね』）という考えから、長崎の英元章（吉田秀雪）に師事します。享保九年（1724）、主家の転封に伴い大和国郡山に移り住み、同十二年には吉里より里の一字を賜り、里恭と改名します。「不行跡」のために家禄を減じられるなどという挫折も経験しますが、問もなく許され、同

十五年に家督を継ぎます。特に四十年代半ば以降から宝暦八年（1758）五十六歳で没するまで、重要な藩務に携わり、絵画制作活動も活発化しました。

淇園の絵画の師である英元章は、黄檗僧で道釈人物図を善くした逸然性融に学んだ渡辺秀石の弟子にあたります。黄檗宗は、承応三年（1654）に中国より来日した隠元隆琦によって開立されました。黄檗僧たちは明・清の新しい文化をもたらし、黄檗宗周辺の実術は黄檗美術と呼ばれます。濃厚な彩色で精緻に描かれた頂相や道釈人物図、黄檗僧が余技として描く墨竹図などは、日本の画家たちに大きな刺激を与えました。淇園も黄檗美術に惹かれた一人であり、英元章を通じて、長崎の逸然やその門下の蘭溪若芝、渡辺秀石などの画風を学んだようです。淇園の代表作の「関羽図」（東京国立博物館蔵）は、伽藍神として黄檗寺院に祀られた関羽を題材としており、濃厚な陰影表現や精緻な描き込みなどには、逸然系の黄檗美術の影響が窺えます。

黄檗美術の刺激を受けた淇園ですが、分野を限定せず、興味を惹かれる作品を幅広く学んでいます。淇園に特に多くのインスピレーションを与えた作品が、「臥遊千里図画冊」（唐招提寺蔵）です。この画冊は、三十枚の絵と書などから成っており、表紙に「臥遊千里図」と記された題簽が貼られています。絵は、中国・

明末清初頃の画工の手によるものと思われ、南宋風の折枝の花鳥図や、明風の山水人物図などバリエーションに富んだ画題・画風が収められています。落款には、「趙昌」「馬麟」「管道昇」「唐寅」などの名が見られ、宋～明の有名画家の絵に倣っていることが分かります。淇園自筆の『日記断片』（宇賀志屋文蔵）には、唐招提寺に訪れた際に、「臥遊千里図と申候唐絵の絵巻物」を鑑賞したことを記しています。本画冊がこれにあたり、淇園の時代には巻子装であったようです。明治期の記録によると、元禄十一年（1698）、徳川綱吉より拝領したといい、現在まで唐招提寺に伝わっています。この画冊に収められた図のうち、淇園が特に日記で称賛しているのが、琴の傍らに臥す人物図、管道昇の花鳥図、趙昌の花鳥（桑に蛾）図、梨花図、梅図、千辨葵図です。その彩色と描写の細やかさは見事であると淇園は感嘆しています。

琴の傍らに臥す人物図は、図1にあたります。淇園が油絵のようだと述べているように、ねっとりとした濃厚な陰影表現が施されています。琴が無弦で、菊が瓶に挿されることから、陶淵明を画題としていていると考えられます。淇園は、この陶淵明の姿勢や瓶花、水差などを転用して、「睡童子図」（克念社蔵、図2）を描いたことが知られています。図をそのまま写すのではなく、老齡の陶淵明を幼い童子の姿に変えつつ、濃厚で精緻な表現や文人趣味的な取り合わせを新しい形で見事に活かしています。

淇園筆「梅花小禽図」（個人蔵、図3）は、淇園が称えた梅図（図4）より八重の紅梅を、管道昇の花鳥図（図5）より瑠璃色

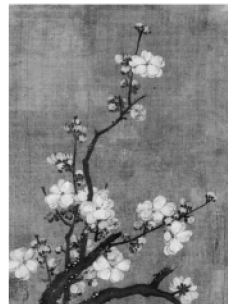
の鳥を、趙昌の桑に蛾図（図6）より鳥がくわえる蚕蛾を取り出し、組み合わせて描いています。この他にも、梅図や管道昇の花鳥図は、淇園筆「紅梅小禽図」「山茶花小禽図」（『文人画粹編』11巻所収の図38・49）にも取り入れられています。

「梅花小禽図」（個人蔵、図3）は、モチーフの形状や、濃厚な彩色、細かな描き込みなどをこの画冊より学んでいます。細く鋭い小枝が多く伸びるチクチクとした質感は、画冊の梅図には見られず、若芝の弟子の上野若元筆「梅花小禽図」（個人蔵）など、黄檗美術の梅図に近い表現です。親しんだ黄檗の花鳥図と新たに目にしたこの画冊の図様を織り交ぜて新しい作品として仕上げていることが分かります。また、淇園の梅の枝は、美しい弧線を描きながら左右にバランスよく広がっています。参考とした図と比較することで、整えられた形を好む淇園の特色が顕著になります。

この画冊には、水墨の山水図も含まれていますが、淇園の日記には、それらの図への感想は記されていません。淇園の現存作も、彩色の人物図や花果・花鳥図、墨竹図が主であり、水墨の山水図は基準作が定まっています。画冊に収められる図への関心の高低からも、淇園の好みが見えて興味深いです。文人画というと、柔らかな筆墨を用いた南宗様式が主流となりますが、高い身分で広い教養を誇り、為政に関わりながら楽しみのために絵を描くという士大夫に近い存在であった淇園は、最新の情報に触れつつ、自由に自らの美意識に沿った造形を磨いたと言えます。（宮崎もも）※下線引の作品は、柳沢淇園展に出陳いたします。



図1 「臥遊千里図画冊」陶淵明図 部分

図2 淇園筆「睡童子図」  
（克念社蔵）部分図3 淇園筆「梅花小禽図」  
（個人蔵）部分図4 「臥遊千里図画冊」  
梅図図5 「臥遊千里図画冊」  
花鳥図（管道昇落款）図6 「臥遊千里図画冊」  
桑に蛾図（趙昌落款）